
再び出逢えることを信じて…

架羅駆璃 千佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再び出逢えることを信じて…

【Zコード】

N7198Y

【作者名】

架羅駆璃 千佳

【あらすじ】

主人公『小林つばさ』は未来からきた女の子。

つばさは大好きな『山田こうや』を死から救うため『万能薬』をもつて來た。

つばさといつやが繰り広げる切ない恋物語。

作っているときに私も涙した作品です。

#1 ?サッカー?

「つばさーいつたよー」

「うん」

私は高校2年の夏を優雅に満喫している。
『小林つばさ』は高校2年の夏を優雅に満喫している。

私は胸まである黒いストレートの髪をしていて、二重の目をしている165cmの女の子。

趣味／サッカー 特技／サッカー どちらもサッカー。
私はサッカーが好き。

だけど、サッカー部に入ろうとは思わない。
本格的にしたいわけじゃなくて、サッカーは遊びのひとつとしてカウントしている。

2

8月7日
近所の公園で友達 『井上まこ』 『上野ふみき』 『山田こうや』 とサッカーをしている。
3人ともサッカー大好きっ子。

まこは、黒くて長い髪を斜めに結い上げサイドボーンテールをし
ていて、少し化粧をしている。
まこは私の唯一の女友達だ。

ふみきは、とてもよく似合っている坊主頭ですぐく体付きがいい。
ふみきはよく気が利くやつ。
みんなは『ふみ』と呼ぶ。

こうやは男らしい短髪で、よく一人で抱え込むことがあるからやっかい。

みんなは『こう』と呼ぶ。

私はまこからもらつボールを受け取ると、そのままゴールイン。

「あーもう！ これ以上走れねー」

「はー！？ 何言つてんの？ ダラシないねー」

私はこうの背中をバシッと叩いた。

「イッテー…」

こうは私が叩いた背中をさすった。

「なー。喉渴かねー？ 飲み物買つてくるけど何がいい？」

「お！ ふみ。 気い利くなー。 僕、ミネラル！ いつものな

「つばさとまこは？」

「あたしポカリ」

「私はー… 行つて決める」

私は立ち上がり、ふみの隣に行つた。

「一緒に来てくれるんか。サンキューな

私たちは公園から少し離れた駄菓子屋に來ていた。

「えーっと、こうがミネラルで俺が ポカリでいいか

「へー。 ふみもポカリなんだー。 私はどうちかつていうと、アク

エリ派かな」

私はアクエリのペットボトルを掲げてみせた。

#2 ?恋バナ?（前書き）

セリフばかりですが、背景は自由に想像してください。

#2 ?恋バナ?

私たちが買い物をしている頃、まじといひせ

「ねーいひしてー。彼女とか作んなーの?」

「は!? 作る訳ねーじゃん」

「え! なんで?」

「なんでつて…。 いひやって4人でサッカー出来なくなるじゃ

ん

「あーなるほど」

「そういうまじはどうなんだ?」

「え! あたし! ? ないないないないない! !」

「え… そんなに…?」

「うん! だつてあたし。正直男子とまじいひの関係つて重いんだよ

ね

「あー分かる気がするー」

「まじ! ? 分かってくれる人がいてよかつたよー」

「つか、俺が一生結婚できないんじやない?」

「www」

恋バナだ wwwwww

ところ変つて私とふみは駄菓子屋をでて公園に帰る途中。
買ったペットボトルを一人2つずつ持つことにした。

「なあ、つばさ。相談したいことがあるんだけどいいかな?」

「ん? どうした?」

「えっとね。俺、女子に告白されたんだ

「…」

「つばさー？」

黙りこむ私の顔を覗き込むふみ。

「告られた…？」

「うん」

「… やつたじやん！」

私はペットボトルを放り投げてふみに飛びついた。

「あ、でも俺、断わろうと思」「ひ連

「え、どうして？」

私はふみから離れペットボトルを拾った。

「だつて俺に彼女ができるならつばさりと遊ぶ時間少なくなるじゃん。それ、すっごく嫌なんだ。俺！正直、つばさらところのすっごく楽しいから壊したくないんだ」

ふみは私に笑顔を向けた。

「ありがと！ 私もふみらといるときが一番樂しい…！」

「わっ！ 早く帰んなーとあいつら怒るかもよ」

「うん」

私たちは公園を目指して走り出した。

「ひいらも恋バナでした。

#3 ?中学生 vs 高校生?

「あれ? ま」といひませ?」

「あれじゃない?」

公園に戻つてきてまこといつの姿がない。
2人は奥のグラウンドで中学生くらいの男子とサッカーをしていた。

「なーにやつてんだる。 おーい。 まーじー」「

ふみの声が届いたらしく、こちらを向いて手を振った。

田をそらしている間にこいつの足元にあつたボールを中学生に取られてしまい、簡単にボールがゴールに吸い込まれていった。

「おう。 遅かつたじゃねーか

「まあな」

「で、あの中学生たちは誰なの?」

私に向いてネラルを渡して言った。

「つばさりが遅いからま」と2人でバスしてたら急にあのガキ供が『俺らと勝負しようぜ』って持ちかけたから、ちと、ゲームしてたんだ

「それっていひが不利なんじゃね?」

「ま、いんだよ」

「今は立ち上るとグランドの方へ走つて行つた。
ひやう中学生らと何か話しているようだ。」

しばらへすると、じゅうが返つて來た。

「おし！あのガキ供ともう一ゲームするぞー。」

「フンフー先ほどよりかはマシか。だが！！俺たちには敵つまい！なんせ我ら京豊中サッカー部なんだからなー！」

京豊

！？

だめだ！止めなくちや。京豊とサッカーなんかしちゃ

！！

じゅうが

！！

じゅうが

「やーって！第2ラウンドのはじまりだー！」

じゅうが叫ぶと同時にホイッスルが鳴った。

25対31

私たち4人が圧倒的勝利に終わった。

#4 ? 痴?

「そろそろ暗くなつてきたし、帰らつか

「おひ」

私たちは家から乗つて来た自転車にまたがり走り出した。

嫌な感じがする…

あの日が今日…

なら

やだやだやだやだやだ…!!

考えたくもないよ…

そんなのやだ!!

だが、その日の夜。

山田家から私に電話がかかつて來た。

『…。つばわちやん。落ち着いてよく聞いてね。こうやが

』

私は受話器を静かに戻した。

私の瞳には涙がたまっていた。

それを見たお母さんは

「つ、つばわーー..びついたの?」

私はお母さんの問いかけに答えることなくケータイとあるものを

持つて勢いよく玄関から外に飛び出した。

私は「おひやママの言葉をもう一度想いで出してみる。

『…。つざわちやん。落ち着いてよく聞いてね。こうやが今、病院に運ばれたわ。いつやに絶対言つなつて言われてたんだけど、こうや、『癌』なの。もつ、助からないの…。お願い、こうやのそばにいてあげて。木子久病院よ』

くそつ…！

分かつていたのに…！

分かつていたのにもできやしなかった…！

私は無能だ！

どんな力を持っていても変えてあげなきゃ意味ないじゃん！

#5 ?交差する想い？

「あ、つばさー。」

病院にはもうまことにふみが来ていた。

「まーじ…。じつはー…？」

「集まりましたか。それでは中へ」

医師が病室から出てきて私たちを案内してくれた。

「今はまだかるうじて意識を保っています。あとはもう時間の問題です」

「意識はあるんですね？」

「ええ」

「なら、じうは助かります」

私はみんなの耳を疑うようなことを言つた。

「な、何言つてんの? つばさ。先生が時間の、問題だつ、て…」

「私ね、本当は未来から来たの。未来では今日、8月8日午前2時37分8秒に、じうが逝つてしまつ。私はその、そんな未来を変えるためにじつちに来たの」

私はポケットから家から持つて来たあるものを取り出した。

「じれはね。私がじうのために発明した薬なの。どんな病気だつてこれ一本で治るんだよ」

私はうつむいた。

分かつていてる。

この薬を使えば私はもうじうじはこられない。

でも私は「いつの未来を変えると誓つた。」

だから

「そのあとつばさは死つるんだ?」

ふみの声。

少し震えている。

「私は……この薬を使うと元いた世界に帰るの。これが私がやりたかったことだから。やることを果たせばここにいる必要はない」

「何ばか言ってんだよ……つばさは俺たちに必要なんだ!」「いつもお前を必要としているんだ」

「やめ、ひ……」

弱く細い声がかすかに聞こえた。

『…………』

病室にいた誰もが口にした。

「俺の……た、めに……つばさが……消える、こたー、ねえ」

「やだ!私は何が何でもあなたを生かす。この液体を飲めば、この病気は治る」

「バカヤロー!……」

いつの口から大きな声が出た。

「俺が生きたってなー、つばさがいねーんじや意味ねーんだよー。」

いつの息が荒い!

このままじや……!

「大丈夫。私はただ元いた場所に帰るだけ。死ぬわけじゃない」

「それでも……俺のそばにいてくんないきや意味ねーんだよ！ 知ら
ねーだろうけどなー俺の中でつばさはいつの間にか俺の糧になっ
てんだよ！ 僕はつばさが好きなんだよ……」

最後の一言。

『俺はつばさが好きなんだよ！…』

ああ。こう。
ありがとう。
今わかつたよ。
私もこうが好きなんだ……。
あなたを守りたい。そばにいたい。
だけど2つ手に入れることは不可能。
だったら私は

「こう。私もこうが好き。だから……」

私はビンのふたを開け、一気に口の中へ流し込んだ。
そして、こうの口へ移した。

「な……！」

移し終えた時、私は光の粒子に包まれた。
「みんな、ありがとう。また、逢あうね」
私の頬を涙が伝う。
私を包んでいた光の粒子がパンツと鳴つて散った。

これでよかつたんだ。

私が次に目覚めたのは元の世界だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7198y/>

再び出逢えることを信じて…

2011年11月21日16時30分発行